

卒業生代表の手塚聖さんは壇上で力強く答辞を読み上げた。「私たちは自信と誇りを持ってこの場にいます。ここでの絆がずっと続いていくことを願っている」。続いて校歌斉唱。広い体育館に響く校歌は「久遠の門」（真理の門）「鷹網」（俗世）など難しい単語が並ぶが、曲調は明るい。

今日1日、白糠高校（白糠町）の第71回卒業式。保護者と在校生が見守る中、3年生25人に卒業証書が手渡された。3年生を合わせて全校生徒66人。生徒数が多かった時代に造られた体育館は密を避ける対策が十分に講じられ、式には保護者や在校生が列席、校歌も歌った。

コロナ禍でも学校行事を通常に近い形で行えるのは小規模校だからこそ。白糠高は一昨年度の学校祭を中止にしたが、本年度の学校祭や体育祭、見学旅行（修学旅行）、校外学習などを実施できた。全生徒が運営に関わるだけに行事を通じて生徒の絆も強くなる。

それにも増して小規模校の一番の強みは「生徒一人一人に合わせた学習指導、進路指導ができること」と田村信明校長は強調する。学習につきまとい生徒、進路に悩む生徒に教師が寄り添って指導してきた。

開校はまだ白糠村だった19

絆を育んだ「久遠の門」

「校歌」物語

白糠高校①

49年。標茶農業高白糠分校として設置された。翌年に本校が釧路湖陵高、釧路軍士見高と代わり、51年3月に富士見高白糠分校として第1回卒業式を行った。卒業生は1人。本年度の25人を加え1万1600人以上が白糠高から巣立った。

分校からの独立は51年4月。町立の白糠高となり、59年に道



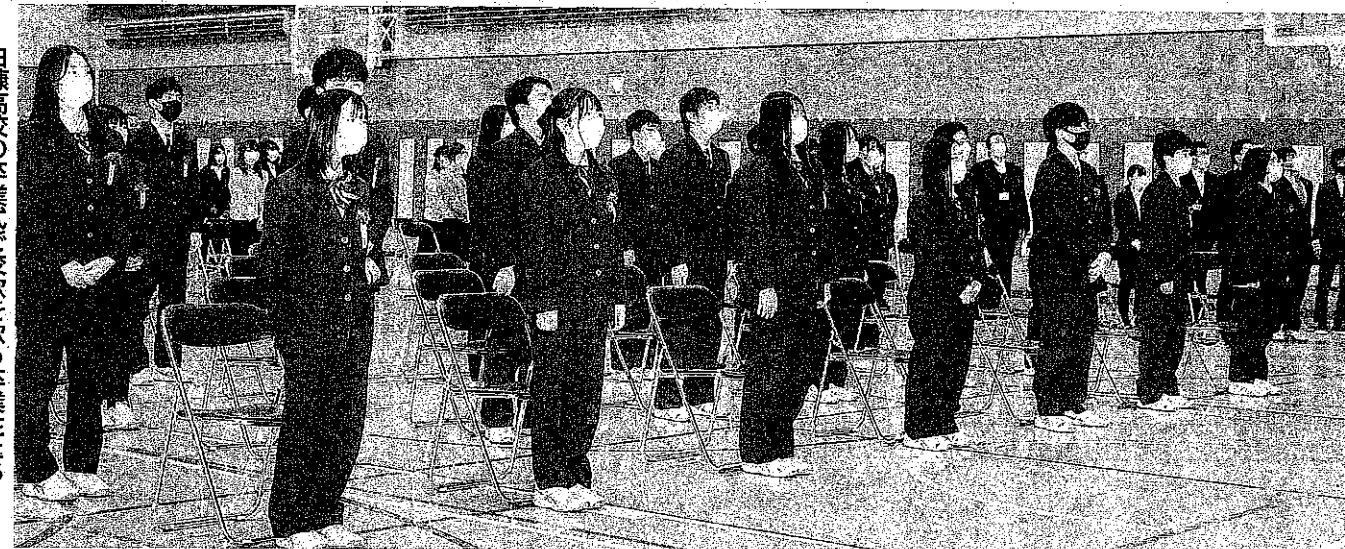
作詞者の江口榛一さん（左）と妻の康子さん（江口木綿子さん提供）

その名よし白糠
——白糠高等学校校歌——
作詞 江口 榛一
作曲 大川 八朗

一、からまつ並木うつくしく
枝さしかはすその如く
かたみに肩をくみかはし
久遠の門に入るとき
これぞこれわれらが母校
その名よし白糠お白糠高校

二、茶路の流れを巻き返し
磯を噛み噛む青波の
たぎれる力その如く
盡きぬいのち汲むところ
これぞこれわれらが母校
その名よし白糠お白糠高校

三、丹頂の鶴たな一羽
ははたき舞へるその如く
鷹網の世にきよけき
ひとすぢの道あるところ
これぞこれわれらが母校
その名よし白糠お白糠高校
（表記は江口氏直筆歌詞に基づく）



白糠高校の卒業式で校歌を歌う卒業生たち（小松巧撮影）

52年6月、当時の教頭の知人だった江口さんがたまたま白糠高に来て「詩と学生」という演題で講演をした。この時に校歌制定の話が持ち上がった。江口さんは予定を変更して3日間、町内を歩き、帰京後に詞を完成させ、知人の大川さんに作曲を依頼した。

校歌の歌詞やメロディーをもとに高校の物語を紹介する『校歌』物語。今回は白糠高校です。大倉玄嗣が担当し、6回連載します。

校歌聞けます

白糠高校の校歌は同校のホームページ（HP）の「学校案内（校訓・校歌等）」のページで聞くことができます。同校HPのURLはhttp://www.shiranuka.hokkaido-c.ed.jp/?page_id=132